るやうにしていはれた。

大勢の負傷者の中を、いち〳〵かういひながら歩かれた。

やがて副官たちがバケツで氷を運んで來た。大將はその一キレ〳〵を、負傷者の口に入れてやられた。

負傷者たちは、ポロ〳〵涙を流しながら大將を仰いだ。「早くよくなつて、大將のもとで死にたい」と思はぬものはなかつた。

私もその氷の一片を口に貰つた一人である。

「少尉はひどくやられたやうだのう。折角からだを大事にせいよ」

といはれた。

私は泣けて〳〵仕方がなかつた。傷いた我身が怨めしかつた。

今日でも大將のこの言葉を忘るゝものではないのである。

廣い野の中に立つた大將の淋しい姿、それは今も目の前にハツキリと映つてゐる。



# 三七　血涙の書

大將の「旅順日記」こそ血と涙の記録である。讀んで涙なきを得ないものがある。

こゝにその重點のみを摘記して、當年の思ひ出としよう。

最も激戰の十二月、將に旅順陷落せんとする前の一ケ月より開城談判の一月五日までの分である。

このとき保典少尉は既に亡い。

## 旅順陣中日記

### 明治三十七年

十二月八日　晴、靜穩、

敵艦射擊。午前より兒玉、伊地知と談ず。午後、兒玉より各參謀に訓示。兒玉と會食。夜、第十一師團前面銃聲盛なり。

同　九日　曇、東風

朝、岩村來りセバストポリ脱出を報ず。大庭中佐二〇三行き。早朝、兒玉を訪ひ、殿下（山階宮）の御宿所を見る。兒玉大將歸北を送る。午食後、第十一師團長、第九師團長を訪ひ、敵情等を聽く。

同　十日　朝來大風、飛雪、

午前、山階宮殿下御來着、伺候。夜、リンゴを献ず。夜、大庭中佐歸る。

同　十一日　有風、烈寒、零下十度、

殿下、黑井中佐、山岡少佐と陸軍陣地、豐島山御巡視。各工兵大隊長を工兵部長室に會議臨席、午食を共にす。

保典遺骨、遺物を送り來る。夜、大岡力來談。今朝有レ詩。示二志賀氏一、後に長篇の和韻あり。

爾靈山險豈難レ攀　男子功名期三克難一
銕血覆山々形改　萬人齊仰爾靈山

同　十二日　好晴

保典遺物毛皮マントを藤井副官に贈る。兼松と豐島山に登る、十一時より三時迄。坂田時正より



ミカン一箱贈り來る。全身浴をなす。夜、大谷瑩溫外從軍僧面會す。殿下終日御休養。安原捕虜を從へ爾靈山に登る。

同　十五日　曇

朝、鮫島師團長來り、十八日奇襲の事を決す。佐藤大佐を呼ぶ、共に午食す。磯村少佐歸京、保典の遺物を托送す。

同　十七日　晴

今曉、第七師團高丁山占領、九時報あり。昨夜より山岡參謀第七師團に至る。鴨湖嘴の砲臺火藥庫を破り、北砲亦火藥庫を破る。望臺裏の敵數百を野砲にて斃す。水雷艇一隻擊沈。

同　二十日　好晴

午前、東郷海軍大將、參謀秋山中佐外一名と來營、今後作戰の目的に付相談す。午食。大庭中佐誘導、火石岑子に徒歩行。夜に入り歸來。夜食後、九時汽車にて歸艦。

同二十四日　好晴

夜、落合部長の病を弔ふ。落合、安原、津野田病氣の爲めミカン、リンゴを贈る。

同二十六日　好晴、無風

午後、豐島山に登る。東京留守宅よりウイスキ其他及び保典に諸品到來、乾柿腐敗、物品を汚す甚し。

同　三十日　好晴

書を留守に送る。

明治三十八年一月一日　好晴

午後二時過銃聲熾なり。拂曉、第九師團の一部高地占領の報あり。續て望臺を攻撃、第九、第十一師團協力、午後占領。午後二時半比敵の軍使來る、開城の事なり。夜會議、規約書なる。

同　二日　好晴

朝山岡少佐先登、十二時を期し、委員長伊地知少將、有賀等水師營にて會見、夜に入調印濟み。

朝、書を兒玉大將に送る。

同　三日　好晴

西大將より名刺に

きのふまで砦を守る仇人もけふは浮世の友にやあらん

返しに、

對向ひし敵もけふは大君の惠の露に沾ひけり

朝、友安少將（註、保典少尉の旅團長）轉職告別に來る。

同　四日　好晴、曉霜甚だ多し

本日津野田、川上を遣り、ステツセルに鷄三十羽、酒貳ダースを送る。明日の會見を約せしむ、（一昨彼れより申込あるによる）

同　五日　好晴

朝、參謀長、安原參謀、川上と水師營に至り（津野田參謀ステツセルを迎へ、共に來り待つ）會見辨當を共に食し、別後、松樹山、二龍山を見て歸る。

## 三八　死以上のもの

大將はよく第一線へ飛び出された。いくらとめてもきかれなかつた。遺言にもある通り、西南役以來死所を求めてゐられたことは、だれにもよく讀まれた。日清後にも、彈雨の中を飛び廻られるので

幕僚をハラ〳〵させた。

奉天戰では、いよ〳〵あぶない中へ飛び込んで行かれるので、「大將は死ぬるつもりだな」といはれたものだつた。

ある人に「人間は死なうと思つてもなか〳〵死ぬるものぢやない。彈も中る時には中るが、中らぬときにはなか〳〵中るものぢやない」といはれたりした。

旅順では、第一線も第二線もなかつた。師團長なども消耗品だといつてゐたくらゐであつた。鮫島大將（第十一師團長）などは、塹壕から塹壕を飛び歩いて、前線を激勵されたものであつた。

乃木大將が前線へ飛び出すから、といつて不思議ではないが、大將が「死所」を求めるつもりだつたと思うと、涙なきを得ない。

幕僚が「絶對に第一線へ出ないことを約束してもらひたい」といつたくらゐである。大將は、答へて「それは嚴しいな。しかし、めい〳〵流儀がある。坐つてゐて指揮の出來るものもあるが、俺には出來ん。そんな約束は出來ん。俺が第一線へそれほど出るといふことは氣がつかなかつた。以來は成るべく氣をつけるよ」といはれた。

家康は「諸人のボンノクボ（襟首）ばかりを見て居て、合戰などに勝たるものにてはなし」といつ



たが、大將はさういふ意味もむろんあつたが、それよりも、自分の死所を求めたいといふにあつたやうだ。

米國の從軍記者スタンレー・ウオッシュバーン氏は、――「第一回總攻擊のあつた八月の一週間、乃木大將は常に前線に出てゐた。此方の丘に立つかと思へば、彼方の山に移つた。將軍はその所屬部隊を驅つて、勇氣と忍耐力のあらん限りを盡さしめた。しかも、自らも亦全く同樣であつた。露軍の砲火に斃れたり、病院に悶死した士卒の苦よりも、更に深刻を極むるものであつた」と書いてゐる。

大將は、だれに言はれなくても、生きてゐたくなかつた。旅順のことも一生の苦しい思ひであつたであらう。

旅順で死骸の山を築いてゐるとき、大將のもとへ、だれともわからぬ者から寄越した手紙が、山のやうに積まれてあつた。「切腹しろ」「辭職しろ」といふ手紙であつた。

心ないものゝ仕わざではあつたが、それも「勝ちたい」といふ一念からであつたらう。大將の家へも石を投げたり、門前で罵るものさへあつた。

大將の家に限らず、上村大將の家に石を投げたことも有名な話であり、師團長や、聯隊長の家へは盛んに石を投げ込まれ、子供は外にも出られず、學校へも行けないやうなことがあつたものだ。

中には「俺しの忰を生かして歸せ。そんな無駄死をさすために戰爭にやつたのぢやない」などといふ手紙さへあつた。

勝つたとなると、石を投げたことも忘れて提灯行列や、旗行列で、それ等の人の門前を萬歳で歡呼した。

石を投げたり、提灯行列をやつたりした。

それもたゞ勝ちたい、勝つてもらひたい一心からであつた。

大將のもとへ來たさういつた手紙を見ては、腸九廻の思ひであつたらう。「何の顏あつて父老に見えん」といふ詩が生れたのも、故あることであつた。

旅順戰が拂取らぬので、だれしも苛立たしくなつた。大將とてもユツクリ構へてゐるわけではない。しかし、思うやうに行かなかつた。止むを得ず多くの人を斃さなければならなかつたのである。

それでこそ、保典の死を聞いても「申譯が立つ」といつたくらゐ、大將は日夜胸を引裂く思ひでゐたのである。千の勝典、保典を以てしても、償ふことが出來ない思ひであつたのである。

大將は何事も自分の罪だと思つてゐられた。こんな手紙が來ても幕僚には「だれにも言ふな」といつてゐられた。「これが知れては兵隊をどうする？　自分はいゝが、自分をたよりにしてゐるものが俺に腹を切れ、と言つて來てゐると聞いたら何と思うか」といはれた。

旅順戰直後のこと、幕僚の一部を轉任さすやうな話があつたときも、大將は承知されなかつた。この場合轉任などさせては、旅順戰の失敗からだ、と世間で思うだらうといふ大將の深い考へからであつた。

旅順が落ちたとき、大將は戰死者の爲めに祭壇を設け、その前に立つて、泣く〳〵弔詞を讀まれた。列座皆泣かぬものはなかつた。大將の胸を察すると、たゞ「死」の外に行くところはなかつたであらう。

大將は、どうしても生きては歸れぬと思つてゐられたであらう。しかし、旅順でも、奉天でも死ねなかつた。そして心を狹めて、東京へ凱旋——といふよりは孤影茫々として歸られた。

手や足のない負傷兵たちを見ても堪へられぬ苦しさであつた。ヒマを見ては、戰死者の家を訪ねて行つた。生きて歸つた我身を責めさいなんだ。どうしても行くところは「死」の外になかつた。

參謀であつた山岡中佐の盲姿を見るにつけても、胸の潰るゝ思ひであつた。中佐は、旅順の軍使として有名である。

明治三十七年八月十六日の朝は、小雨が降つてゐた。

我軍の方から白旗を樹てゝ、水師營の露軍の第一線へ行つた。向ふでは「まだ戰爭をしない先からもう降參するのか」と思つてゐたところが、降參どころか、降參を勸める使であつた。

その軍使が山岡中佐である。中佐は旅順の攻擊開始に方り、非戰鬪員たる婦人、小兒、僧侶をダルニー（大連）へ送つて、砲火の中より、救け給はんといふ我　天皇陛下の思召を傳達すると共に、無益に人命を害はんよりは、潔く降伏するに如かずと勸告した。

翌日、彼の回答は總て「否」であつた。「聊か所信あり」といふのであつた。そして、こゝに旅順戰の幕は切つて落されたのである。

中佐が負傷したのは、奉天戰の幕仕舞である三十八年三月十日の午前十時ころであつた。大山元帥（滿洲軍總司令官）の日誌に「三月十日午前十時我軍奉天を占領せり」とあるやうに、その「十時であつた」

場所は、郭三屯といふ所で、九師團の戰況視察に行つてゐたとき、右のこめかみから左の眼に突き拔けた。

中佐が擊たれたとき、三分間くらゐは見えたさうだ。その三分間がこの世の姿と永久の別れであつた。殘念にも、とうゝそれ以來眼を開くことが出來なかつた。

盲中佐を見る大將の胸はたまらなかつたであらう。大將も靜子夫人も中佐を勞はりつゞけた。恩賜金で、盲人が手さぐりで時間を讀むことの出來る時計を作つて與へたりした。だれに何をしても足らない心の苦しみであつた。

中佐は晩年を盲人教育に盡し、國定教科書を點字で飜譯したりした。

中佐の夫人は細川家の出で、女官長をした人である。中佐の實弟山岡重厚中將は、その昔、兄中佐と同じ旅順で一少尉として戰つた。

支那事變には大部隊長として北支に戰つた。軍務局長時代、中將の創案になる陣太刀式軍刀が、この戰爭に大きな手柄を樹てゝゐる。

勸降旗は敷布の半分くらゐの大きさで、山岡家の記念となつてゐる。

## 三九　鶉

ある日であつた。私は、トツサキの塹壕の中にかゞんで敵の砲臺線を見つめてゐた。

砲臺の中から露兵が出て來て、鐵條網の杭を打つたり、何かしら引きずり廻したり、鍬を打ち込んだりしてゐるのが私の眼鏡に映つてゐる。

タマはビユウ〳〵と、耳を掠めて行く。

そのときである。うしろでガタ〳〵と人の足音を聞いたので、うしろを振り向くと、乃木大將が幕僚を連れて來られたのであつた。

「こいつはいかん」と思つたので、私は目を一つぱいに張り廣げて、前方を睨んでゐた。

すると大將は、ツカ〳〵と私のそばに來て、靜かに、——

「もうソロ〳〵鶉が出るかの」

といはれた。

鶉？　私は何のことかわからなかつた。「鶉が出るかの」といふ言葉が、この場合似もつかぬ、私への問ひであつた。「敵情はどうか」といはれたのなら、私も答へるすべがあつたが、鶉では何とも仕方がない。

私が默つてゐるので、大將もそれ切り何ともいはれず、ツカ〳〵と私の前に出られた。

「危なうございます」といつたが、大將は知らぬフリをして、かゞんで、岩蔭に咲いてゐた撫子をつ



きみ取られた。

私はハツと思つた。撫子を取られた大將の心もちがどうであつたかは、大將だけのもので、何とも想像し難い。しかし、このときすでに勝典中尉は戰死してゐたのである。或は勝典を弔ふ心持であつたかどうか。——私は目頭が熱くなつた。

私は、大將の手に抱かれて死にたいと思つた。昔、將校集會所で私の手を取つて、「候補生シツカリやれ」といはれたことなどが思ひ出された。

鶉のことは、そのときにはわからなかつた。鶉がゐるなら取つて食ふくらゐのことは知つてゐても旅順が鶉の名所であることを知つたのは、ズツと後のことで、漱石の「滿韓ところ〴〵」に、鶉のことが載つてゐるが、大將は日清役にも同じ旅順を攻擊して居るので、鶉を燒いて食つたことがあるかも知れない。

「少尉、もつと大きい目をあけて、よく見て居れ！」とでもいはれるかと思うと、「鶉は出るかの」である。意外でもあつたが、さすがに大將であると思つた。

# 四〇　忠は一つのみ

乃木大將とステッセルとの水師營の會見は、日露戰爭の偉大な劇的シーンであつた。

會見は、明治三十八年一月五日、午前十一時三十五分幕を開いた。

ステッセルは、午前十時五十分に到着した。

會見場は、水師營劉家の一室で、（入口から左に入つた部屋）野戰病院にあてられた家である。

アンペラを敷いた牀（ゆか）の上には何も敷いてなかつた。

土間には、それまで手術臺に使つてゐた、巾二尺、長さ六尺の机を据えて、その上に白い布がかけてあつた。

机には彈痕がある。手術中飛んで來た彈に中つて孔があいたのである。机の板は四脚の足にのせてあるだけのものである。

大將は少し遲れて午前十一時三十分に馬を乘りつけた。

案内役の時計が間違つてゐたといふことだが、大將は何ともいはれなかつた。そして、ツカ〳〵と會見場に入つて上座（牀の方）に立つて、手をのばして握手した。

ステッセルは腰をかゞめて、如何さましほらしく見えたが、大將は胸を張つて嚴然としてゐた。

通譯は川上俊彦氏であつた。

とに角、こゝで百四十日をかけた旅順戰の幕を下ろしたのである。

兩將軍が會見して、開城談判を行つた机は、今も陸軍々醫學校に保存されてある筈である。旅順戰役患者の整理に當つた關係から、記念として持ち歸つたものである。

談判に使つたインキ壺とペンは有賀博士邸にある筈である。博士は、國際法の顧問として、第三軍に從軍してゐたのである。

會見場の庭に棗（なつめ）の樹があることも名高い。乃木、ス兩將軍駒つなぎの棗といふことになつてゐる。

ステッセルは、戰爭終つて後、軍法會議で、旅順開城の責任を問はれ、死刑を宣告された。

之を聞いた大將は、當時パリに在つた、津野田是重少佐（第三軍參謀だつた人）に命乞ひをしてやれといつてやられた。

津野田少佐は、すぐに開城の止むなきに至つた次第から、開城當時の武器、彈藥、糧食等、ステッ

セルとして取つた處置について、事細やかに書いて、パリ、ロンドン、ベルリン等の新聞に寄せた。

それがためか、裁判がくつがへされ、一年間言渡しがのびた。

その後ステッセルは、ネバ河の上流にあるシリセンブルグの要塞に監禁されてゐたが、千九百十三年、歐洲戰爭の前年死んでしまつた。

シリセンブルグの要塞は、國事犯人の監獄で、中庭に絞首臺があり、犯人が窓から死刑のさまを見るやうに出來てゐる。

大將が自刄されたとき、「モスクワの一僧侶」として香奠が屆いた。それはステッセルに間違ひなかつた。

大將のために助けられたことを知つてゐたステッセルは、大將の自刄を聞いて、ひどく嘆き悲んだといふことで、會見後もひどく大將に心を傾け、今まで會つた人の中で、乃木大將ほど感激を與へられた人はないといつてゐた。

ステッセルは、シベリアを、茶商人（あきんど）となつて放浪してゐたといふことであるが、大將自刄のときはモスクワにゐたらしい。餘程人間としても出來た人らしい。籠城中、諸將の間がうまく行かず「狂へる騾馬」などと綽名されてゐたし、ステッセルを不利にしたのは、極東軍司令官スミルノフだが、ステッセルに同情する人も多分にあつたのである。乃木、ステッセルと、旅順戰を中心にして、よき組合せであつたといへる。

旅順戰中、秋田縣の詩人午山なる人が、大將に詩を送つた。その一節にステッセルのことを「易地皆然、忠一耳（のみ）」とあつたので、大將は非常に共鳴された。

旅順戰の主人公、大將も逝き、ステッセルも地下に隱れ、そして古戰場は徒らに老いてしまつた。

## 四一　風の如く往く

奉天の會戰は、乃木軍の迂回によつて、最後のトヾメを刺したのである。

旅順を屠つた乃木軍は、北上して奉天の會戰に加はるべく、遼河に沿うて急進し、左より〳〵と奉天を包んでかゝつた。

奉天では、右より鴨綠江軍（川村大將）第一軍（黑木大將）第二軍（奧大將）第四軍（野津大將）第三軍（乃木軍）の順序に絞めてかゝつた。露軍の兵力三十五萬に對し我軍二十五萬といふヒラキが

あつた。五箇師團からの違ひである。露軍の總豫備隊は、シベリア第二軍團で、その右翼の控へとしてゐた。

ところが川村軍が、乃木軍より早く頭を出し、清河城方面に現はれたので、クロパトキン（出征軍總司令官）は、山地戰に適する日本軍は、乃木軍を山手に廻し、東よりして奉天を包圍するものと判斷して、その總豫備隊を清河城方面に送つた。

總豫備隊が運動を起して、東へ移つた途端に、乃木軍が頭を出した。驚いたのはクロパトキン、運の惡いときは仕方のないもので、もうどうすることもできない。

乃木軍は無人の境を行くが如く、ドン〳〵と北へ〳〵と進んで奉天を包んでしまつた。

三月九日、奉天附近には恐ろしい大風が吹いた。石を動かし、砂を飛ばし、目もあけて居られなかつた。露軍の方では、擊つた彈が逆戻りするかと思うやうな恐しい風だつた。

翌くる十日は、一天拭ふが如き麗かな日であつた。その朝目出度く奉天を占領した。

露軍は、先行せしむべき輜重を取殘したので、退却部隊は、車の列の上にのしかゝり鱗のやうな騒ぎをしてゐるところへ、砲彈がころがるやうに飛び込んで行つた。

露軍の諜報勤務はメチヤ〳〵だつた。乃木軍の進路を知らなかつたといふは、あまりにノンキであつた。遼河に沿うて大兵團が北進しつゝあることが分つてゐたのか、ゐないのか。「日本兵若干酒屋で酒を飲んでゐる」とか、「日本軍は藁人形を使ひ、大部隊に見せかけてゐる」とかいふ報告がクロパトキンの耳に入つてゐたのも滑稽である。

支那人間諜の中に「乃木軍發見」の報を齎したものがあつたが、クロパトキンはそれを信じないで金もやらずに追つ放つた。それが乃木軍だつたのである。

奉天戰で乃木大將は、奉天を包み切れず、袋の口を閉ぢ得なかつたことを悔しがられた。「もう二箇師團もあつたら、一兵も遁がすことぢやないのだが」といはれた。

露軍は、袋の口からゾロ〳〵と、鐵鎖指して遁げて行つた。——その四萬を捕虜にし、その二十萬をたゝき潰したが。

奉天を舞臺とする乃木軍の運動は、すばらしく大きかつた。旅順のやうに、梅雨空みたいな戰さとは違ひ、スバ〳〵とした戰さ振であり、大將も始めて胸に支へてゐる石ころを取去つたやうな思ひであつたらう。

三個師團の精鋭を提げ、遼河に沿ふて北進する大將の得意思ふべしである。

旅順戰を以て、大將が無策の攻擊の如く評する人もあるが、狀況はさうでなかつた。當時の兵器か

らいつても、肉彈を以てする外に策がなかつた、といつていゝのである。

二十八センチ砲といつても、ベトンの砲臺に對しては、何の效果もなかつた。黑いけむりが、濛々と立上がるのを見ると、砲臺でも崩したと見えるが、何の變哲もなかつた。

防ぐとなれば、如何やうにしても防げる時代であつた。——いつかは要塞も兜を脱ぐに極まつてゐても、——今は反對に防ぐ法なしといつていゝかと思ふ。空中に對して、砲臺なんか何の役にも立たない、といつていゝ。

だれが無益な犧牲を供するものがあらう。旅順は當時の狀況眞に止むを得なかつたのである。

大將の作戰に誤りがあつたのでも何でもない。



## 四二　泣きぬれて

日露役後である。大將は久留米地方の特別大演習に陪觀を仰せ付られた。馬丁の鎌次郎も隨いて行つた。

久留米に青々館といふ旅館がある。大將のヒイキ宿で、この地方へ行くと、必ずこゝへ泊られたものである。

昔からの定宿で、宿の主人も飯時には自分の膳を持つて行つて、一しよに食つたりするほどであつた。

大演習の陪觀に來たが、宿は青々館でなかつた。統監部で宿割をして他の家が當てられてゐた。

そのある日である。大將は車に乘つて、大本營へ行つた。（馬が着くまで、車が當てがはれてあつた）

その途中であつた。車のうしろから「閣下々々」と呼ぶものがあつたので、振りむくと、青々館の主人であつた。

主人は息せき切つて車を追つて來た。

大將は車をとめさせた。

「オウ、主人か、元氣かの」

「閣下、このたびは、御苦勞さまでございます」

「ウム、こんどはお前のところへ行けないが、又來ることもあらう」

「お久しぶりに昔話なりと承りたいと存じましたが、殘念でございます。どうぞ又一度この地方へ」
「ウム、――家内は皆達者かの」
「有難うございます。皆達者で居ります。閣下には戰爭で御子息樣を」
主人は、早や目に一つぱいの涙を浮べた。
「もう、それはいふな〳〵。娘たちは大きくなつたらうの」
青々館の主人には二人の娘があつた。大將が泊つたときは、いつも二人してお給仕に出てゐたので大將はそれを思ひ出したのであつた。
「ハイ、有難うございます。閣下、娘たちの大きくなるのは早いものでございまして、長女はもう嫁に行きまして、ツイ先頃孫が出來たやうなわけでございます。次女ももう二十になります」
「さうか。そりや――」
大將は沈んだ口調で、かういつたきり、あとは何もいはなかつた。
青々館の主人は怪訝に思つて、大將の顏を見つめた。
見ると、大將は眼を閉ぢてゐる。
主人は、すぐに大將の心持が針のやうに胸に突き刺さつた。

大將は二人の子供を亡くしてゐる。自分の娘たち、――大將に可愛がられた娘たちが達者で、孫までできたといふことを聞いて、親として、死んだ子供たちのことを思ひ出すのは、無理からぬことではなからう。さうでなかつたかも知れないが。――そのときの樣子が何となく、さう思へた。
(お氣の毒だ。こんなことを申上げなければよかつたに)と思うと胸がつまつた。
「主人、又會はう。娘たちによろしくいつてくれ」
「ハイ、――」
主人はもう何もいへなくなつた。
「車屋！　やつて貰はう」
「ハイ〳〵」
車の輪はゆるやかに動き出した。
主人は棒のやうに立つたまゝ、大將の姿――その淋しい後ろ姿を見つめながら、涙をハラ〳〵と落した。
一、二日して、主人の家へ鎌次郎が來た。大將から娘たちにやつてくれといつて、一封の金包を渡した。

主人はそれを押し頂きながら、疊の上へ泣き崩れた。

## 四二　生きて地上に

大將はそのころ深夜に庭を歩かれる日が多かつた。眠られぬ日があつたやうだ。

書見しても一時間とつゞかなかつた。茶を淹れたり、煙草を吹かしたりして、何か考へ込まれるやうな時もあつた。

大將の部屋にいつまでも灯が燈つてゐるのを、馬丁も女中もよく見たものだつた。

靜子夫人もあまり口を利かれなかつた。

食事もいつもの半分しか口にせられなかつた。

水を取り寄せられてのむやうな時がよくあつた。

大將は一生を淋しく終つて行かれた。

地位をいふなら大將であり、伯爵であり、功一級である。人生至上の榮譽を荷つてゐる大將だつた



がいつも自分を狹いものにするやうな事件が起つた。大きな石に壓されてゐるやうな心持で暮した。

「電車に乘つてゐると、座席を覗つてゐるものはいつまでも坐れないで、フラリと入つて來た者が却つて席を得る。これが運不運といふものだ」

といはれたことがあるが、大將も人生電車の幸運者ではなかつた。

だが、その暗いもの〻中から、こんな大きな光りを世の中に殘さうとは、大將自身も考へてゐられなかつたらう。一生を小さく、狹く渡つてゐながら、いつでも、大きく廣いものとなつて、光りかゞやいた。

いくら小さくしてみやうとしても、どこまでも大きく擴がつて行つた。

人間乃木の姿は、この大東亞戰の人の上に、そのまゝに映つてゐるのだ。

イヤ、大將自身、尙ほ生きて地上にあるのだ。

# 乃木大將略譜

**嘉永二年**　一歳

十一月十一日、武藏國、江戸、麻布、日が窪町、長府毛利侯上屋敷内に生れた。父は十郎希次、世々毛利家の侍醫であつた。武藝に長じ、馬廻に取立てらる。母は、常陸土浦藩士長谷川金太夫の女壽子である。

幼名は無人、後源三と改め、又文藏となる。

明治四年、希典と改名した。

**安政三年**　八歳

正月より、麻布六本木町、島田松秀につき大學、習字を學んだ。

**安政四年**　九歳

正月より、芝赤羽町、松岡義明に就き、小笠原流の禮法を學んだ。

**安政五年**　十歳

十一月父母弟妹と共に、江戸より長門國豐浦に移住した。
父君の諫言容れられず、閉門を仰付けられたがためである。

**安政六年**　十一歳

四月より、結城香崖につき、漢籍、詩文を學んだ。十月より後藤兵衛に就き、武家禮法、及弓馬故實を修めた。

**文久元年**　十三歳

正月より、工藤八右衛門につき、人見流馬術を、小島權之進につき、日置流弓術を、多賀鐵之丞につき洋式砲術を學んだ。

**文久二年**　十四歳

正月より中村安積につき、寶藏院流槍術を、黑田八太郎につき、田宮流劍道を、三月より福田扇馬につき、兵書歷史を學んだ。



十三、四歳の頃より、大將はかくも多くの武藝を學んだ。當時武家の子弟は、武道の修業が第一であつたといへ、大將は非常に多方面に涉つてゐた。

**文久三年**　十五歳

六月より、藩、敬業館内の集童場に入學した。
十二月、父より吉田松陰の遺著「武教講錄」を手寫して與へられた。

**元治元年**　十六歳

學業を志し、出奔し、萩なる玉木文之進正韜の門に入つた。半ば農し、半ば學ぶといふ仕込方であつた。

**慶應元年**　十七歳

九月より、明倫館文學寮に通學した。
十一月より、栗栖又助に就き、一刀流劍道を學んだ。

**慶應二年**　十八歳

六月、山砲一門の長として、豐前國小倉に出戰した。「長州征伐」軍討伐のためである。

十月二日、山縣狂介（有朋）の奇兵隊と合し、山砲を以て、德力村の壘を破つた。

このとき、左足の甲に銃創を蒙つた。

**慶應三年**　十九歳

正月、再び文學寮に入學した。

**慶應四年**　二十歳

正月、栗栖又助より一刀流の目錄を受けた。

押しも押されぬ劍道家となつた。

**明治元年**　二十歳

四月、文學寮を退いた。過つて左足を負傷したゝめであつた。

**明治二年**　二十一歳

正月、報國隊の漢學助教となつた。

十一月、藩命により、佛式練習のため、伏見御親兵兵營に入隊した。

**明治三年**　二十二歳

正月、山口藩舊諸隊暴動に付、鎭壓のため、歸藩を命ぜられ、山口、金古曾方面に戰つた。

三月、伏見の兵營に歸つた。

七月より、京都河東御親兵練兵掛として京都に至つた。

十二月、歸藩した。

**明治四年**　二十三歳

一月、豐浦藩陸軍練兵教官を命ぜられ、第一次に御親兵、第二次に鎭臺兵を教育して卒業せ

しめた。

十一月上京、二十三日、陸軍少佐に任ぜられ、東京鎭臺第二分營附となつた。

十二月、舊佐賀藩兵より成る歩兵二中隊を率ゐて、信州上田に出張し、城を收めて分營を設けた。

**明治五年**　二十四歳

一月より二月まで、上田に滯留した。

**明治六年**　二十五歳

四月、名古屋鎭臺附となつた。

六月、舊津藩、及彦根藩兵より成る二中隊を率ゐて、金澤城を收めて分營を設けた。

**明治七年**　二十六歳

五月、名古屋鎭臺附を免ぜられ、休職となつた。（四ヶ月）

九月、陸軍卿傳令使を仰付られた。



**明治八年**　二十七歳

十二月、傳令使を免ぜられ、熊本鎭臺、歩兵第十四聯隊（小倉）長心得仰付られた。

**明治九年**　二十八歳

十月、秋月の賊討伐仰付られ、小倉城を警備し、後、聯隊を率ゐて、豐前國豐津に出戰した。

**明治十年**　二十九歳

一月、西南役に參加した。

二月二十七日、肥後國玉名村の戰鬪に於て、左足背骨貫通銃創を受けた。

三月、第一旅團參謀兼勤仰付られた。

四月九日、肥後國、邊田野村の戰鬪に於て左腕貫通銃創を受けた。

四月二十二日、陸軍中佐に任ぜられ、歩兵第十四聯隊長を免ぜられ、熊本鎭臺參謀を仰付られた。

十月三十一日、父希次病死した。

**明治十一年**　三十歳

一月、歩兵第一聯隊長に補せられた。

八月二十七日、薩摩藩士湯地定之四女靜と結婚した。

**明治十二年**　三十一歳

八月二十八日、長男勝典が生れた。

十一月、赤坂區新坂町五十五番地に邸宅を設けた。

**明治十三年**　三十二歳

四月、陸軍大佐に任ぜられた。

**明治十四年**　三十三歳



十二月十六日次男保典が生れた。

**明治十六年**　三十五歳

二月、東京鎭臺參謀長に補せられた。

**明治十八年**　三十七歳

五月二十一日、陸軍少將に任ぜられ、歩兵第十一旅團長に補せられた。

**明治十九年**　三十八歳

獨逸に留學した。

**明治二十一年**　四十歳

歐洲より歸朝した。

**明治二十二年**　四十一歳

近衛第二旅團長に補せられた。

**明治二十三年**　四十二歳

歩兵第五旅團長に補せられた。

**明治二十四年**　四十三歳

四月、栃木縣、那須郡石林に、農生活を始めた。

**明治二十五年**　四十四歳

二月三日休職仰付られた。那須に隠栖すること九箇月。

十二月、歩兵第一旅團長に補せられた。

**明治二十七年**　四十六歳



九月、東京を發し、十月宇品出發、日清役に參加した。

二十四日、花園口に上陸、旅順に向つた。

**明治二十八年**　四十七歳

四月、陸軍中將に任ぜられ、第二師團長に補せられた。

日清役の功に依り、男爵を授けられた。

九月八日、金州大連灣出發、臺灣に向つた。

十月、臺南に進入し、十月、南部臺灣守備隊司令官仰付られた。

**明治二十九年**　四十八歳

四月、仙臺に凱旋した。

十月、臺灣總督に任ぜられた。

十二月二十七日、母壽子臺北にて病死した。三板橋の日本人墓地に葬つた。

**明治三十一年**　五十歳

二月、臺灣總督を免ぜられ、休職を仰付られた。

休職七箇月にして、第十一師團長に補せられた。

**明治三十三年**　五十二歳

北淸事變勃發した。

**明治三十四年**　五十三歳

部下のことよりして休職仰付られた。

那須野に隱栖した。

**明治三十七年**　五十六歳

日露戰爭勃發、二月五日動員令下ると共に、留守近衞師團長仰付られた。

五月二日、第三軍司令官に補せられ、六月一日宇品出發、旅順方面に向つた。



六月六日、陸軍大將に任ぜられた。

**明治三十八年**　五十七歳

一月、奉天方面に向つた。

**明治三十九年**　五十八歳

一月十日、宇品上陸凱旋、一月二十六日、軍事參議官に補せられた。

四月一日、功一級金鵄勳章を賜つた。

**明治四十年**　五十九歳

一月三十一日、學習院長となる。

九月三十一日、伯爵を授けられた。

**明治四十一年**　六十歳

五月、旅順表忠塔除幕式のため、東郷大將と共に滿洲に赴いた。

**明治四十四年**　六十三歳

二月、英國皇帝戴冠式參列の爲め、依仁親王、同妃殿下に隨員として、東郷大將と共に六月着英した。

**大正元年**　六十四歳

明治天皇御大葬當日なる九月十三日午後八時、夫人と共に殉死された。

# 乃木將軍と旅順戰

旅順戰は、乃木大將の血の歴史であり、涙の歴史ともいふべきものであるが、奉天戰に至つては雄渾なる性格の反映ともいふべき戰爭であつた。

一方は細かい曲線の現はれであり、一方は太い直線の現はれであつたと思ふ。

大將が旅順戰に於て「苦」の限りを盡した代りに、奉天戰に於ては、それを償つて餘りあるものであつた。

## 一　旅順への口

初夏の心よい涼しさが膚を撫でて來た。

ほと、ぎすでも啼きさうな頃である。遼東半島——日清役のみぎり、大將が花園口から馬を進めて旅順に向つたのも十年の昔となつた。昔のやうに赤ウラのマントを薫風になぶらせながら、大將は南へ南へと向つた。

十年後の五月、こゝで又同じ戰さをしようとは思ひも設けなかつたであらう。

五月（明治三十七年）南山を落した奥第二軍と交代して、奥軍は北へ、乃木軍は南、旅順を目指すことゝなつた。

南山では、敵の抵抗がひどく、一時は金州北方の高地線に後退して、再擧を圖らんとの意見さへ出たくらゐであつた。

だが、軍司令官奥大將は聽かなかつた。「大和魂とは何か」といつた。「大和魂とはかく〳〵のものでござる」ともいへず、――知れ切つたことである。――突擊又突擊で遂に南山を落したのである。

軍司令官の決心がこの嶮を拔いたのであつた。乃木大將は、その戰線を弔ひながら、肖金山の頂きにあつて「大和魂」で押し込んだ奥大將と握手しながら戰勝の祝詞を述べた。

しかし、奥大將の瞼は熱いもので濡れてゐた。

この一戰で、――二十二日より二十五日に至る間に、四千三百有餘の死傷者を出したことを思うと大將の胸中は燒けるやうであつた。三萬六千四百の中、その一割以上の死傷者を出したゞけでもどんなに激戰であつたかゞ想像される。

一時は、全く彈藥の不足さへ訴ふるに至つた。半年分の砲彈を打ち盡したくらゐであつた。大本營でも、砲彈不足にはひどく驚いた。

しかし、南山の犧牲は、旅順への大きな口を開いたことになつた。「南山危ふしといふ者は反逆者なり」などと、守將フォーク如何に叱咤しても、洪水は堰き止めることは出來ない。

南山落つと聞いて、驚いたのは、大連（當時はダルニーといつた）である。ふだん通り店も開き、南山の砲聲を、樂隊入りで聞きながら、ダンスもやれば、芝居も見るといつたときに、「退却、敗走」と聞いて、キンタマは上り放しになり、荷物を背負うて、驛へ驅けつけたが、遁げる兵隊で鈴成りの盛況である。

驢馬や荷車で遁げたのは、金持だけで、大かたはトボ〳〵歩いて、水も飲ます、パンも口にはいらず、ビー〳〵泣く子の手を引いて、旅順指して落ち延びた。第三軍――乃木大將軍は、旅順へ旅順へと遁げまどふ市民の尻について、足を早めた。

そのとき、大將の手にあつたのは、第一師團と第十一師團と、徒歩砲兵第三聯隊などであつた。

後に、第九、第七の兩師團が加へられ、旅順の主陣地の攻擊を行ふことゝなつたのである。

南山を何十倍もした旅順戰が始まつたのである。

## 二　砲乎人乎

一體、そのころどんな兵器があつて、鐵の要塞旅順にブッつかつたのか。

露軍とても、決して立派な兵器があつたわけではない。大砲の射程も知れたものであり、大きな大砲、――十五センチとか、二十四センチといつた大砲はあつても、それが、一萬メートルも飛ぶ彈なんか一つもなかつた。

たゞ、彼には機關砲（銃とはいはなかつた）を持つてゐたが、われにはなかつた。

機關砲にはひどくやられた。バタ〳〵と斃れた。一度に七十發のタマを受けたものさへあつた。

何しろ箕から豆でもこぼすやうに降りそゝいで來るのだからたまつたものぢやない。南山で始めていつに擊たれたときはだれでも度膽をぬかれた。

我軍のみが劣つてゐたといふわけではないが、野砲でも、一發打つと、ゴロ〳〵とうしろへ下がつて行き、ドシンと土手にブッつかるといつた有樣。もとのところへ連れ戻るのに、兵隊たち腰骨が痛んで困つたくらゐである。

中には、九サンチ臼砲といつた砲は、強い風が吹くと、擊つた彈がヒョロ〳〵とあとずさりをしたくらゐである。今から思ふと、笑ふにも笑へない大砲であつた。

木の筒に竹の箍をはめた砲――今でいふと迫擊砲と名のつくものであらうが、――さへあつた。敵の鐵條網の前へ引つぱつて行つてブッ放したことさへある。

彼にもなかつたが、飛行機も、戰車もなく、全く裸でコンクリートに突き當るやうな戰鬪であつたのである。

戰車もないではなかつた。――といつても荷車をブリキで圍つて孔を開け、鐵砲を突き出した子供のおもちやみたやうなものである。

英國が戰車の元祖といふが、日本こそ本家だといつて差支ない。物は何でも、旅順戰にあつたのだから仕方がない。

毒ガスさへもあつたのである。といつてもホスゲンだの何だのといふ恐ろしい奴ではない。アンモニアを嗅がさうといふ至つて風流な毒ガスである。しかし、日本軍が毒ガスを使用したといはれては大變だといふので、使ひはしなかつたが、塹壕にゐる露兵之を嗅いだら、狸のやうに逃げたに相違な

い。

「日本軍の喊聲は露兵の心臓を貫けり」と、ロンドン・タイムスの評にあつたが、それである。突撃、突撃、これには露兵も全く兜をぬいでしまつた。

銃剣、日本刀――この前には露兵も手出しが出來なかつた。

肉彈以て旅順を占領したのであつたが、肉彈だけでやれるわけのものではない。彼が八千メートルの距離にある我軍を射撃する間に、我はその半ばにも達しない大砲では角力にならない。たゞ肉彈あつて機械の及ばざるを及ぼしたのであつた。

何しろ、旅順のあの魔城を破つた意氣込みはえらいものだつた。「能く攻めた、能く守つた」といふ外字新聞の評が之を盡してゐる。攻圍軍の半ばをこゝに失つたのも止むを得なかつたのである。

## 三　虎の如く龍の如し

六月二十日、滿洲軍總司令部が編成せられ、大山巌元帥がその司令官となつた。總參謀長は兒玉源太郎大將である。

そのとき、大山元帥は六十三歳、兒玉大將は五十三歳、乃木大將は五十六歳、いづれも働き盛りであつた。五十代で大將といふことも、今日から思つても、すば抜けて若かつたと思ふ。

乃木軍は、敵の前進陣地たる歪頭山、双頂山、鞍子嶺、クーイン山を攻撃した。夏も本格となり、暑さの中を死にもの狂ひとなつて進んだ。

山は嶮しく、谷は深く、壘は堅く、第二の南山戰であつた。

スターリン・グラードで露兵は隨分ねばつたが、あの執拗さ、頑固さは昔も今も變りない。

この前進陣地の中に凹字形山といふところがあつたが、突撃したとき、露兵は十數人となつても、棒のやうに頂上に突立つてゐた。銃剣が彼の胸に突き刺す瞬間、かねてからだに石油を浴びてゐたと見え、自分で火をつけ、生不動となつて、材木を倒すやうに斃れた。それくらゐであつた。

スターリン・グラードの露兵は、自殺用に最後の一發を殘してゐたといふことだが自分のからだを火にするくらゐのねばりがあるところを見ると、ドイツ軍の手こずつたのも無理はない。全くすごい兵隊である。

敵は逆襲又逆襲、どこまでもやり返して來た。ウラー〳〵の聲が物凄く山谷にひゞいた。

しかし、我軍の勇猛ぶりに、敵はひどく豫期に反したと見え、旅順内部に於ける各將領間の爭ひが絶え間なく起つてゐた。

日本軍は紙の如く破れるものと思つてゐたのが、意外な結果となり、主將ステッセルも靑息吐息となつた。

しかし、何といつても前進陣地のことである。防備も薄い。いよ〳〵本舞臺たる砲臺線にかゝつたときは、乃木軍を悉く地雷火と砲火の下に燒き伏せるといふ意氣込であつた。

## 四　砲臺の頭

旅順、旅順、――乃木軍が痛手を受けた旅順だつたが、その旅順は一體どんな仕掛をしたのであらう。

香港も、シンガポールも、いよ〳〵となつては十日もかゝらなかつた。それが旅順では百餘日もかかつた。

香港やシンガポールは、これでも立派な要塞なのか、といひたいほどだが、旅順よりもモツト堅固であつたかも知れない。それが十日で手を擧げたとなると、一體要塞などといつても何の價値があるかといひたい。

こんなことなら、わざ〳〵あんなデカイものを金をかけて造る必要がなかりさうなものである。

四十サンチの何のといふ大砲を据えて一體とうするつもりだつたのだらう。旅順では我軍が二十八センチ砲を使つたので世界を驚かしたが、要塞に四十サンチ五十サンチと大砲ばかり大きくても何もならない。

普佛戰爭で、パリは百五十日かゝつて落した。こんどのパリは、草を薙ぐやうなものだつた。

魂の拔けたものには、砲臺も大砲も何の役にも立たない。

ヴェルダンでは、一年もかゝり、ドイツ軍だけでも七十五萬の損傷を受けた。それに香港やシンガポールには手もなく拔いた。

尤も昔と今とを同じやうに考へてはいけない。第一兵器が違ふ。機械戰萬能でなくても、今日のやうであると、砲臺の頭なんか甚だ不要である。

空に向つて何程の抗力があるだらうか。ヴェルダンでも、空中戰はあつたがその頃は、空中で挨拶

するくらゐのもので今日のやうなすばらしい空中戰はなかつた。

日本空軍のすばらしさ。如何な砲臺先生も、プリンス・オブ・ウェルス君も物の役に立たない。

何しろ砲臺の大きな頭がメチヤ〳〵にたゝきのめされたのではどうにもならない。

旅順の砲臺は、堅固にしつらへてあつたればこそ難戰苦戰もし、百餘日を費したことも無理はないのである。一臺の飛行機もないあの當時としては止むを得ないことだし、香港や、シンガポールが意外に早かつたゞけ、そこに、兵器の恐ろしい進歩があり、人間魂も、いよ〳〵以て練りに練られた賜物であるといへやう。

旅順は、明(みん)の時代朝鮮へ往く船つき場で、豐太閤の朝鮮征伐のときは、明の水軍がこゝに陣取つてゐたのださうである。

一八九八年春には、ロシヤが清國から大連と、旅順を借受け、翌年にはシベリヤ鐵道を大連まで進めた。

旅順は、一八六〇年英國の支那艦隊マクライオンが故障のため立寄つたところで、そのころは名も知れない入江だつたので、そのマクライオンを曳いて入つたアルゼリンの艦長アーサー大尉の名を取つてポートアーサー(port Arthur)といふやうになつたのださうだ。勝手に名をつけて、そこが自分の領地くらゐに思つたであらう。

砲臺のコンクリートを厚くしだしたのは、明治三十三年の北清事變からであつた。四十二年には完成する計畫らしかつたが、それを待たないで日露戰爭となつた。二〇三高地などはまだ手がつけてなかつたところである。東鶏冠山北堡壘、二龍山砲臺を中心とした部分が最も堅固だつた。黃金山は、山地獨眼龍將軍みたやうに、こゝからやつて來ると思つたかなか〳〵堅固だ。

とに角、砲臺の數が、海正面二十七、陸正面八十二、合計實に百九の砲臺堡壘であつた。重輕砲九百六十四門、それに機關砲といふ厄介者が無數にあつた。

守兵は、正規兵約四萬で、南山で千三百人、前進陣地で千二百人を失つたが、海兵義勇兵合せて四萬七千餘人と見てよい。

四萬七千餘人が、十萬の日本軍を相手として、五萬有餘の日本兵を斃したことになる。旅順の坊主山も馬鹿にならない。

「ナニ、わけない。國旗を持つて砲臺へ上りさへすりやいゝのだ」などといつてゐた人さへあつたのだ。子供の運動會みたやうなつもりである。

また、それくらゐしか旅順について知つてゐなかつたのでもあつた。日清戰爭のことが頭にこびり

ついてゐたのでもあつたらう。

## 五　仰ぐ大將

三十七年六月八日、午前十一時、乃木軍司令部は、大連の北二里の北泡子崖へ着いた。大將の宿は舊露國鐵道守備兵の監視小屋である。

軍は、第七、第九師團はまだ手許になく、第一、第十一の兩師團と、後備歩兵第一旅團であつた。後備旅團長は友安少將で、保典少尉が屬した部隊である。

六月九日、大將は伊地知參謀長を從へ、第一師團の陣地を巡視した。南山とても前進陣地である。それがあの通りの工事を施してゐた。歪頭山一帶の高地線とても、南山に劣らない。これで見ると、本防禦線砲臺線が凡そどんなであるかゞわかる。

大將は、毎日幕僚の半數と食事をされてゐたが、話はたゞ「砲臺線の工事如何」にのみ集中されてゐた。

如何に鐵の要塞でも陷落しないためしはない。守る者は、攻むる者に叶はない。

といつて、旅順の防備がどんな程度であるかは、わかつてゐない。見たところ砲臺らしいものもなく、たゞ坦々たる丘である。こゝに、何がしつらへてあるか全くわからない。工事にたづさわつた支那人を殺してから後は猫の子一疋入れなかつた。突つかゝつて見て始めてわかつたといつてよいかも知れなかつた。黄金山のうしろ（咽喉部）がチラツと見えてゐるだけで、あんな大仕掛（砲臺、外壕兵營、交通壕など）のものがあらうとは思はなかつた。

南へ下がるに從つて、敵の海軍から擊たれるくらゐのもので、そんなことが頭痛の種であつた。旅順の山は、前進陣地の歪頭山が三七二メートルくらゐ。砲臺線は、二〇三高地と望臺が高いだけで、その他は大した丘ではない。二龍山、盤龍山といつても「山」といふほどのこともない。

二〇三高地は、名の如く二〇三メートルの丘である。土人は老爺山といひ、英人はたゞハイ・マウンテン（高い山）といひ、露人はウキフーカヤガラといつてゐた。何とも極つた名のついてない山である。

二〇三高地の頂に登ると、旅順の港内は目の下にある。しかし、こゝへ取つくまでが大變である。二〇三高地は全線からいつて左下りの山である。前には、高崎山、松樹山などがあり、それを飛び越

して二〇三高地へ向ふわけに行かない。

敵艦と陸との戰爭ほどまどろこしいものはない。野砲や山砲くらゐでは向ふも相手にしないし、鐵砲では肴のおどしにもならない。

ところが、その敵艦が、ポツ〳〵出て來ては横つ腹から擊つて來る。

東郷さんが、とつちめたからよかつたものゝ、さうでなかつたら、軍艦と歩兵との戰爭、などゝいふ珍戰が起つたかも知れない。

前進陣地中の劍山は、第十一師團の丸龜聯隊が苦戰したところである。標高三六八メートルある。クーイン山といふ名もあつたやうだが、「無名山」で通つてゐる。岩があるから「岩山」、木がないから「坊主山」平たくねそべつてゐるから「海鼠山」などと、みな無名の山の名である。黄金山、白銀山といつた立派な名の山も、見たところは、禿山、坊主山で結構である。

蘆溝橋では「一文字山」といふ名の山（これも山ではない。川原の中の砂の吹き溜りである）が出來たが命名が如何にも兵隊式で面白い。

無名山クーイン山は、占領後、聯隊長西山大佐が四十三山と命名したいと、乃木大將に申出た。四十三聯隊だからである。大將は、聯隊の故郷の名山劍山（つるぎやま）に因んで「劍山」としたがいゝといはれ、それになつた。讃岐の劍山に似た嶮しい山だからである。



大將が「劍山」と命名されたについては、善通寺の師團長時代、朝に夕に劍山の雄姿を眺めてゐられたので、その地の聯隊の功をたゝへるつもりでもあつたらう。

太白山、（私の初陣の地である）老座山を占領すると、目の前に大きな坊主山が見える。大孤山である。

乃木大將の姿は、太白山攻擊中にも屢々仰ぎ見ることが出來た。その白いズボン、赤い帽子が、どんなに力强く、兵士の目に映つたことか。その目の優しさ。「敬禮などしなくてもいゝよ」などといはれる。兵士たちはうつとりとして大將を仰いだものだつた。

太白山の占領が長びいたとき、うしろから、君が代の軍樂が鳴りひゞいた。之を聞くと、全隊一齊に振ひ立ち、突擊、突擊で占領した。

陣頭で「君が代」を聞いたときの感激はたとへやうもなかつた。大將の心は水のやうに白く、肅然として野の上に立ち盡されたであらう。

# 六　山谷皆死屍

八月十六日であつた。小雨が降つてゐた。その中を山岡參謀（後、戰官となつた人）が軍使として水師營に向つた。そして、敵の將校に勸降書を渡した。香港でもシンガポールでもさうであつた。非戰鬪員を損すまい婦人子供を助けようといふ思召であつたのである。

「左樣ならばよろしく」の「直ちに降參しませう」のと、義理にもいへないであらう。旅順も、「我れに自信あり」といつた風にことわつて來た。

「孤立ノ要塞ニシテ、救援ノ途ナク、其ノ指揮官ニシテ、如何ニ智謀アリ、且ツ忠烈ナリトモ、又其ノ兵士ニシテ如何ニ勇敢ナリトモ、到底陷落ヲ免カレザルモノトス。我軍ノ總攻擊準備ハ已ニ整ヒ、遠カラズシテ其ノ發動ヲ見ルベシ」

といふ勸降書であつたが、之に對し、彼は、

「露國ノ名譽ト威嚴ニカケ、到底應ジ難シ。又旅順ノ現狀ニ照シテ正當ニアラズ」

と、キツパリことわつて來た。十七日の午前十時ころであつた。

「日本軍何かあらん」と思ひ上がつてゐた彼に取つては、「何を言ふのか」くらゐに思つたであらう。

「折角だがおことわりする」といふのである。一城の主としては又當然の答へでもあつたらう。

「然らば」と軍刀のつかに手をかけた。大砲にも小銃にも彈を込めた。向ふでは「要塞の明渡しを乞ひたる日本軍に鐵拳をくれたり」と、慷慨悲壯なる訓示を下した。

「大膽なる敵は、我に降服を勸告せり。我が祖國の名譽を擔へる我軍の之に對する回答の當に如何なるべきかは、諸子の既に熟知しある所なるべし。予は諸子の勇武に信賴す。諸子須らく、各自の信仰及び我が尊敬措かざる露國皇帝の爲に奮鬪せよ」

天幕長屋で眠つてゐる我兵の上に、砲臺の蔭で眠つてゐる露兵の上に、雨がサン〳〵と降りそゝいでゐた。

三日を出でずして、旅順の天地は火の嵐となつて暴れ出した。

# 七　大將丘に立つ

大將は、夜のひき明けと共に、幕僚と、護衛兵を從へて二二九高地に馬を走らせた。

八月十九日、第一回總攻擊の第一日が來たのである。いよ〳〵、砲臺線に向つて、乘るか反るかの戰爭が始まつたのである。

重砲百四十四門は一齊に火蓋を開いた。殷々轟々たるひゞきは、今にも旅順を眞二つに引裂くかと思はしめた。

しかし、當時は大砲先生甚だ貧しく、全くなさけないもので向つたものだと思ふ。よくもあれで拔いたものである。今日の大砲などを見ると、「あのときこんな大砲があつたら」と思ふ。

重砲も舊式、野砲も舊式、彈藥も一門五百發ではどうにもならない。大將の心中はどうであつたらう。

やはり、魂であつた。魂が旅順を拔いたのだと思ふ。

あれほど擊つた砲彈にも、ビクともしなかつた。あんなベトンの岩に、少々の砲彈ぐらゐ何の役にも立たなかつたといつてよい。

十九日、二十日、二十一日、二十二日と、何のこともない。大將は團山子東方の丘に立つて居た。こゝは重砲陣地のあるところである。

こゝは敵前千五百メートルの位置である。敵の砲彈は右に左に破裂する。だが、大將は劍を立てゝ凜々として居られる。

第十一師團長土屋中將（後大將）が、大孤山攻擊のとき、立つて敵方を見てゐると、敵の砲彈が來て、兩側に立つてゐた幕僚を斃したことがある。

乃木大將は木のやうに突つ立つて動かれない。ドン〳〵砲彈が落ちるが、砲臺に取りついた我兵の苦戰を見ては、砲彈どころではなかつた。

我兵の屍は、一文字型に、丁字形型に黑くなつて砲臺の前に並んでゐる。

この日までに、既に一萬二千の死傷者を出した。しかし、今はたゞ强襲、强襲の外に何のすべがあらうか。

しかし、この二十二日は盤龍山が手に入つた。二人の兵士が石か何か持つて、盤龍山の頂上へ登つ

て行つて投げつけた。それを見たのこりの十名ばかりのものが登つて行き、こゝで石合戰が起つた。敵は數百名もゐたであらう。

しかし、これが占領の動機となつたのである。第九師團長大島中將（後大將）は、豫備の二中隊を第一線に加へた。

死、死、死あるばかりである。だが、その死によつて、山の大半を占領したのである。開城後、敵はこの兩中隊の奮戰ぶりを喉を掴つて賞めたゝへた。

盤龍山の頂から麓まで、一面の死體である。全く足の踏みどころもない。地面が見えないほどであつた。

外國の從軍記者たちはたゞ呆然としてゐるばかり。「肝腦は地に塗れ、鮮血は野に漂ふ」といつた安價な形容詞で、どうして、これが畫かれやう。

## 八　泣く〳〵戰ふ

二十三日となつた。

大將は團山子を動かれない。

各師團共ひどい損害だつた。盤龍山突擊の第九師團は五百名あまりしか殘つてゐない。他の師團も同樣である。

だが、今は大小多寡をいつてゐる場合ではない。一途に一途に、盤龍山を軸として右は二龍山へ、左は東鷄冠山北堡壘へ戰果を廣げる外にない。

大將は「血を以て獲取した砲臺は、血を以て防禦しなければならない」といはれた。盤龍山の占領がそれである。カン〳〵と頭から大きな砲彈でたゝきつけられる。死骸を山のやうに積み上げる。それでも、こゝを退いたら、もうどこにも足場がない。何としてもこゝを離してはならない。

高地の半面は日本兵の死體でカーキ色に變り、他の半面は露兵の死體で青くなつたのである。

大將も、師團長もみな泣いて居られたのだ。だれも泣かぬものはなかつたのだ。泣く〳〵戰さをしたのだ。

だが、泣いたところでどうなるものではない。涙を拭つて、死の戰ひをつゞける外にないのだ。—日本軍のみがやれた戰爭であつたと、しみ〴〵思ふ。

コレヒドルも、ブキテマ高地も、旅順戰の再現であつたらうが、旅順で死んだ勇士の魂が、今日の人に乘り移つてゐるのだと思ふ。

二十三日、夜半から行動を起し、望臺砲臺目指して突擊に移つた。望砲は、北堡壘と、二龍山との中間に聳へる山で、ステツセルが屢々馬を立てゝ、戰線を指揮したところである。最後――明治三十八年一月一日に占領した山で、旅順戰の幕切れまで息をつないでゐた砲臺である。

つまり、敵中深く斬り込まうといふ壯擧である。

細い月が中天にかゝつてゐた。突擊隊（第九、第十一師團）は肅々枚をふくんで登つて行つたが、その結果は亂戰となり、混戰となり、死骸を以て山谷を埋めたに過ぎなかつた。泣くに泣かれなかつた。

「第九師團ノ歩兵第七、第三十五聯隊ハ全滅シ、爾餘ノ諸隊モ最早三分ノ一ヲ餘スニ過ギズ」

「第十一師團ノ歩兵第二十二及ビ第四十四聯隊ハ共ニ覆沒シ、彈丸ハ僅カニ數發ヲ殘スノミ」

大將が大本營に出された報告を見てもわかる。筆を取る幕僚たちはガタ〳〵と指先が震へてゐた。攻擊は自然に中止された。それも止むを得ない時の場合であつた。

大將は、柳樹房へ移られた。こゝが旅順戰の最後まで司令部としてあつたところである。保典少尉の戰死を知つたのもこゝである。

大將は、「一簣夫レ九仞ノ功ヲ全フセヨ」とある　勅語を拜して、胸をしぼつた。

第一回總攻擊は全く失敗に終つた。一萬六千の死傷を出した。それでも大將は增援を求めやうとされなかつた。

「第一線が死んだら聯隊長は豫備隊を率ゐて砲臺で死ね。聯隊が全滅したら旅團長は旅團の豫備隊を率ゐて砲臺で死ね。旅團が全滅したら師團長は師團の豫備隊を率ゐて砲臺で死ね。師團が全滅したら、軍司令官乃木は軍の總豫備隊を率ゐて砲臺で死ぬる」

こんな決意さへ示されてゐた。

秋が歩いて來た。戰場には冷たい風が吹いて來た。

## 九　「大魔砲」

九月十八日、北の戰場から兒玉總參謀長が、田中參謀（義一、後大將）を伴ふて旅順へ來た。

兒玉、乃木兩將は二三六の高地で會見された。感無量であつたらう。

二十日、兒玉大將は大連へ引かへされた。二十五日、又來つて、火石嶺子の砲兵陣地で、乃木大將と共に情況を偵察した。

十月となつた。悲風蕭々たる中に、かねて据えつけた六門の二十八センチ榴彈砲が、第一發を放した。十月一日である。こいつには敵も驚いたであらうが、けむりはひどくても一向に孔が明かなかつた。

しかし、何といつても、二十八センチ砲をこゝまで持つて來たのはすばらしい。南山から退却する敵が大連の大棧橋をそのまゝ殘して置いたればこそ、陸揚げが出來たのである。

爆藥を仕かけてゐたさうだが、ボタン一つ押すだけの時間がなく、あわてくさつて遁げたゝめ、この「大魔砲二十八センチ」（露將校の言葉を借りていへば）が安々と揚がつたのである。

向ふでは大惡魔であつても、こちらには救世主のやうであつた。とに角この砲で、守備軍隨一の名將コンドラテンコ少將を斃したゞけでも大したものだつた。彼に取つては、コンドラテンコの死が旅順の死を早めたと思つたに違ひない。それほどの猛將であり智將であつたやうだ。コンドラテンコの死んだところは、東鷄冠山北堡壘の穹窖内であつた。

二十八センチ砲は、二龍山だけでも、二千二百十發からの彈を擊ち込んだ。五百トンからのものだが、二龍山君それでも參つたといはなかつた。

しかし、これが市中に落ちたときは、街はデングリ返るやうになつた。女子供の泣き叫ぶ聲が兵士たちの胸をかきむしつた。あの音を聞くだけでも、氣狂ひになつてしまひさうだといつたくらゐである。

何しろ二十八センチ砲は、旅順戰の大きな魔物であつた。

## 一〇　大將涙して

十月二日、兒玉大將は北に歸つた。

第二回總攻擊では、二百三高地を主目標とした。

第三軍の兵力は二萬八千餘に減じてゐた。

十月二十六日から、第三回の總攻擊が行はれた。正攻法によつてやることゝなつた。ジリ〳〵と就

道を掘つて、砲臺下にもぐり込まうといふのであつた。

旅順は一個の岩である。一日二十センチしか掘れなかつたといふことさへあつた。

松樹山、二龍山、北堡壘を主目標とした。二百三高地も同様である。

坑道は進んで三十メートルに及んだとき、向ふからも掘つて來て、孔と孔とが突き合つたことさへあつた。

十月三十日、一戸少將（後、大將）は、自ら進んで第一線に立ち　砲臺に向つて突擊した。取つては失ひ、失つては取り、遂に之を奪つた。

一戸堡壘の名が全軍に鳴りひゞいた。

十一月を迎へた。北の戰場からはしきりに督勵される。大將は鉛を呑むよりも苦しい思ひであつたらう。バルチック艦隊回航の報もあり、居ても立つても居られない場合となつた。

バルチック艦隊は、十五六日頃、アフリカのダカルを出發するといふ報であつた。

十一月二十四日、特別支隊――白襷隊（長、中村覺少將）が、松樹山より、旅順の市街に突入せんとした。天下無雙の壯擧であつた。

「本隊の將卒たるもの、生きて歸ることを思つちやならん。敵に肉薄するまでは、決して發砲するな。本官の戰死した場合は渡邊大佐代れ。渡邊大佐戰死したときは、大久保中佐代れ。一人たりとも生きてゐる限りは、突擊に突擊を重ねよ。白襷隊の名を辱しむる勿れ」

隊長中村少將凛々として言ひ放つた。何といふ悲壯なる言葉であつたらう。代る指揮官を豫め定めて置いたなど、「鬼神泣く」といふ言葉はかういふときにこそ使ふものだと思ふ。

隊の將兵皆必死のまなじりを上げて飛び立つた。成功？　不成功？　それは問題でなかつたのであらう。

出發に當つて、大將は、悲壯なる訣別の辭を述べた。大將の目には涙をたゝへてゐた。言々句々血を吐くの思ひであつた。再會期し難しと思はれたであらう。

「この擧こそ、決死以上の決死である。たゞ〳〵成功を望んで止まぬ。離別の情に堪へざるものあるも、予は諸子の忍耐と勇氣に信賴する」

といつたことを、口ごもりながら言はれた。

しかし、しかし、この擧も失敗に終つた。この目標は旅順市中、白玉山（今、表忠塔の建つところ）であつたが、出發間もなく、中村少將負傷し、代るものも代るものも斃れ、一部は深く砲臺に突入したが、殆んど斃れてしまつた。

今は止むを得ない。第一師團（右翼）をして、赤阪山、三里橋を奪つて二〇三高地に迫ることゝなつた。

戰場にはヒユーヒユーと切るやうな風が吹いて來た。十一月二十六日である。全力を擧げて二〇三高地に向ふことゝなつた。

二〇三高地は、これまでも狙ひの中心だつたが、いよ〳〵壯烈とも慘烈ともいひやうのない戰鬪が繰り返された。一日の突擊十回十五回にも及んだ。

そのいづれの方面もが「非」であつた。何回の突擊も畢竟斃死部隊を横ふるのみであつた。

二十九日午前二時の報告に、「二〇三高地の東北角は、只今敵の逆襲を受けて奪還せられ、西南角にありし我兵も、亦敵の三面合擊に堪へずして、第一散兵壕の位置まで後退し、赤阪山も亦守りを失つた。師團現下の兵力にては到底攻擊を再行すること能はず」とある。絕對絕命である。

十二月一日となり、兒玉大將は再び北方より來り、高崎山に乃木大將と會した。この朝、保典少尉戰死の報を聞かれたのである。

十二月五日、二〇三高地の一角を占領した。二十八センチ砲はこゝでこそ大に威力を揮ひ、二〇三高地上に巨彈を集中した。

高地の一角に觀測所を設けて、港内の敵艦を砲擊した。ポベータは右に傾き、レトウイザンは左に倒れ、バヤーンは坐り込んだ。その他オトワーヂヌイ、シラーチ、バルラーダ、いづれも水の底にサヨナラして行つた。

## 一一　死の挽歌

二〇三高地が取れたので、全線動搖を始めたが、北堡壘、二龍山まだ息をつないでゐる。

しかし、それも旅順のうしろを擊たれたのではどうにもならない。

年も暮れ、一月一日を迎へた。正月といつても戰爭は休まれない。

雪の中からムク〳〵と起き上がつた。目出度い正月である。天の助けか、午後三時には、頂上に日章旗をかゝげた。

その五時が、ステツセルの降伏である。白旗は全砲臺にはためきながら死の挽歌を奏した。

軍使は、水師營南方の我第一線陣地に來つた。そして、ステツセルよりの降伏狀を差出した。

大將が、それを見たのは、夜の九時であつた。感無量なるものがあつたであらう。

彼に死守あれば、我に死攻あり。血と涙の戰爭であつた。

孤立の要塞がいつかは陷落するものと極つてゐても、これほどまでとは思はれなかつた。始めて、地下の戰友に報ゆることが出來たのであつた。

「今後に於ける、旅順口の抵抗は不要なり。依て無益に人命を損せざるため、予は開城に付談判せんことを望む」

との書狀であつた。

五日午前、水師營に兩將が顏を合せた。

午前十一時三十五分であつた。乃木大將は伊知地參謀長、川上行政事務官、參謀を從へて會見場に臨んだ。

ステツセルに從つたのは、參謀長レース大佐、その他參謀たちであつた。

敗將の面影は見るも無慘にやつれてゐた。

會見所は、戰戰病院のあつたところである。

彈は手術中にも飛んで來た。會見の机はその彈痕のある手術臺であつた。

大將駒繋ぎの棗の樹も老いたが、今も昔を忘れずに茂つてゐるであらう。

一月十三日は旅順の入城式である。午後三時ころ式を終つた。大將は早朝に柳樹房を出發し、舊市街から新市街に入つた。途上に整列する將兵——血と汗と泥とにまみれた姿を眺めながら。靜々と馬を進められた。答禮の手も重かつた。

白いものが降りそゝいだ。血のあとを淸めるかのやうであつた。

式後、各師團下の將校、外國武官を、スミルノフ中將(極東軍司令官)の官邸であつた家に招いた。

土耳古のオスマン大佐が先任者の故を以て、外國武官を代表して戰勝の祝辭を述べ、大將の萬歲を唱へた。

オスマン大佐は、ブレブナの勇將オスマンバシアの甥で、伯父と共に露軍に捕へられた。露軍が、伯父に對して非禮を働いたに比べて、乃木軍のステツセルに對する溫情ある取扱ひに涙を流して感激したといふことである。

十四日、水師營の南方にて戰死者の祭典を行はれた。「全軍旅順に入るや、諸士が忠血を以て染みたる山川と要塞とを下瞰する所を相し、地を淸め、壇を設けて、諸士が英魂を招く」と、言々句々聲をしぼつての祭文であつた。大將の聲はしば〳〵途切れた。

その日の夕刻、早くも北方より「遅くも二月中旬までに遼陽附近に集中を終るべし」といふ總司令部の命令が屆いた。

二十四日、思ひ出の旅順を後にして、北上の途に上つた。

二〇三高地、金州城外、――大將の思ひや如何であつたらう。

乃木軍は遼河に沿ふて北へ〳〵と進み、奉天の露軍の右翼に迫り、露軍の喉に匕首を刺し通したのである。

最も雄大な戰さ振りであつた。

## 一二　茫々四十年

茫々四十年、旅順の山の草は生えては枯れ、枯れては生え、山の石もころげて谷に落ち、谷の水も流れ〳〵ていづこかに行つたであらう。

乃木苦（野菊）の花も、血のやうな撫子の花も、昔忘れず咲いてゐることであらう。

〔二〇、〇〇〇〕


大乃木

（認承協文出
あ300019號）

昭和十七年十二月三十日印刷
昭和十八年一月一日發行

定價　一圓八十錢

著者　櫻井忠溫（さくらゐ ちうをん）
東京市小石川區小日向臺町一ノ四一
編輯發行者　高島政衛
東京市小石川區小日向臺町一ノ四一
發行及發賣所　合資會社潮文閣
電話大塚局六二四八・六四三五
振替東京一七四四三番
會員番號一一一七五〇六番
東京市牛込區袋町三ノ六四
印刷所　帝都印刷株式會社
代表者　長谷川隆士
東京市神田淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社

# 青年文化全集

全廿五卷
豫約募集

國家と青年
社會と青年
政治と青年
宗教と青年
藝術と青年
水戸學と青年
文學と青年
科學と青年
人生と青年
時局と青年
戰爭と青年
大東亞と青年
大海外發展と青年
將來と青年
生活と青年
職業と青年
能力と青年
處世と青年
修養と青年
讀書と青年
人物と青年
純一・趣味下
川村・南・人
結婚有丸
本村發
全廿五卷

櫻澤正親雄
野田巽道
中村哲
岸田國士
高木重朗
如是閣
高須芳次郎
舟橋聖一
高田保
富士川英郎
武者小路實篤
下村湖人
伊藤正德
山田清吉
金子光晴
澤田謙
大熊信行
藤森成吉
比嘉春潮
朝倉文夫
高橋新吉
嶋崎藤村
米谷隆三
奈良本辰也
佐藤春夫
上野陽一
岡本一平
峻義郎
松本清張
友成蹴
輝峰

新刊！

結婚と青年
水戸學と青年
文學と青年
大東亞經綸と青年
時局と青年

各巻二圓送二錢
内容見本呈ス
既刊書店に有

—權威者に依る權威書！—

新刊！

新偉人傳全集

野口英世 薄田泣菫 浅野和三郎 著
吉田松陰 山岡鉄太郎 中村天平 著
豐田と田熊 秦豐助 著
軍神傳（下上） 伊藤博文 馬場恒吾 著
空海と最澄 高橋秀榮 著
時宗と秀吉 長田幹彦 佐藤春夫 著
漱石と文學 山田長政 汪精衛 達人 南洲 著
岩崎彌太郎 ビスマーク 孔子と哲學 聖日蓮 聖德太子
全五十卷
豫約募集
各卷二、八〇送二錢

新刊既刊共全國書店にあり（目錄呈）

東京小石川小日向臺町
振替東京一七四四三番
潮文閣

95
241

終